

①中央アルプスしらび平周辺に分布する氷河堆積物の堆積相の研究 その4 下平眞樹

中央アルプスの伊那谷側にあるしらび平には層厚10m~50mの礫層が分布している。これらの礫層は花崗岩の垂角礫~垂円礫からなる巨礫層で、これまで柳町（1983）により、最終氷期前半の2期に渡る氷河前進期に堆積したモレーンの礫層とされてきた。

しらび平北半部の横川上流域の礫層を、径1m以下礫層と径1m以上礫層に分けて検討した。加重変形構造、小褶曲構造、ドレープ構造が認められる氷河底ティルと主に径1m以上以上礫層からなる氷河表面融出ティルがあり、下位より河成礫層~氷河底ティル~氷河表面融出ティル~氷河底ティル~氷河表面融出ティル~氷河底ティル~氷河表面融出ティル~河成礫層の順に重なっている。

しらび平南半部の横川下流域の礫層は、横川上流域で北半部の礫層の下位にもぐり、北半部の礫層の下部の層準になる。すなわち、南半部は新期の礫層、北半部は旧期の礫層とされてきた従来の層序の見解は誤りで、北半部には南半部より上位の新しい礫層が重なっている。

②豊丘村・喬木村付近の天竜峡花崗岩中の含む単斜輝石細粒苦鉄質岩岩脈について 手塚恒人

単斜輝石を含む細粒苦鉄質岩岩脈や細粒苦鉄質岩捕獲岩などが4か所（加々須川寺の前、小川川氏乗、虻川坂島、虻川小屋下）から見出された。単斜輝石を含む細粒苦鉄質岩の多くの岩脈や捕獲岩で、中央付近で角閃石を欠き、自形の単斜輝石と黒雲母と斜長石の組み合わせだったのかもしれない。単斜輝石の $Mg \times 100 / (Mg + Fe)$ は46-65である。加々須累帯火成岩体の北部側（虻川小屋下、単斜輝石の $Mg \times 100 / (Mg + Fe)$ の最高：65）で単斜輝石の $Mg \times 100 / (Mg + Fe)$ が大きく、南側（喬木村氏乗、単斜輝石の $Mg \times 100 / (Mg + Fe)$ の最高55）で小さい。今後は、単斜輝石を含む細粒苦鉄質岩のポイントを増やして、地理的な分布を調べてみたい。

③ミソベタ層を探れ！ 矢口紘史

一昨年度の調査で、豊丘村城の露頭のミソベタ層の中に、長径が70cmほどの赤茶けた火山角礫岩のブロック（岩塊）を確認した。ミソベタ層に火山角礫岩のブロックが含まれる事実から、ミソベタ層が、「岩屑なだれ」が流下し堆積したのではないかという疑問を持った。その後、長径が3mもある巨大な火山角礫岩のブロックが天竜川の河床で発見され、更に「岩屑なだれ」という考えが深まった。今年度までに豊丘村城から林里までの範囲の調査で、新たに3カ所で一昨年同様の火山角礫岩のブロックを発見し、年代測定やプレパラートを作成して顕微鏡での観察を行った。その結果、火山角礫岩のブロックの中に含まれる安山岩の形成年代は約190万年で、塩嶺火山よりも古い火山起源の可能性が出てきた。また、顕微鏡観察からは、運搬された際に、水の影響を多く受けてはいないと思われる。今後も基礎事実の集積を継続して行っていきたい。

④下伊那に生息する生物の食用資源面に関する調査 平田大輔

流通経済システムの発達した現代においては、文字通りの「資源」という役割を食用という目的に適う形で果たす野生生物種は限られた範囲でのみ成立するものであり、特に下伊那のように海岸部を持たない地域においてはの生物の食用資源的価値は希薄であると言えよう。しかし山菜や薬草として親しまれる植物や郷土料理の素材として一部の昆虫・淡水魚・野生動物などが利用されている事象もこの地域の特色と考えることができる。本調査はそうした生物種の生息・利用状況を把握し、並行して文献調査と聞き取り調査により生活文化における認識の検証材料蓄積を目的として実施したものであ

る。本研究の過程において地域住民の生活史と自然環境との関わりが多様な形態で存続してきた側面を再確認することができ、今回の調査結果を活用して飯田市全域や下伊那郡を単位とした地域史を紐解く切り口のひとつとして今後の研究を展開することができるものと判断している。

⑤ハナノキ湿地と周辺の絶滅危惧種の発見・・・4

長野県絶滅危惧Ⅱ類種以上と分布上無いと思われていた植物

北澤あさ子

ハナノキ湿地と周辺で県R. D. B絶滅危惧植物Ⅱ類以上で、市町村別未記載種と・その他、分布上無いとされていた植物を多数発見しましたので、標本を添えて報告します。

飯田市 IB◆キンラン その他◆ツクバキンモンソウ◆タラヨウ

阿智村 その他◆ツクバキンモンソウ

南木曾町 IA◆コアブラツツジ◆ナガバキソチドリ

その他◆トリガタハンショウヅル◆オオハシカグサ◆クロバナヒキオコシ
◆フジテンニンソウ

以上の他に、アオホオズキ・カミコウチテンナンショウ・ヤクシマヒメアリドオシラン・ヒトツバテンナンショウ・アオフタバラン・コケイラン・など絶滅危惧Ⅱ類以上の植物の新産地発見もしました。これらを含め300点以上の乾燥標本を進呈いたします。

⑥「野口の森里山づくり」と植生モニタリング

野口の森里山づくりの会 石井美久

整備作業、植生調査も2年目になり、早くも少し変化が見られるようになってきた。小さな草が増えてきたことは期待できる変化だと思ったが、外来種の旺盛な繁殖力を目の当たりにして、これと同じことがいろんなところで起こっているとすると大変なことだなと感じた。切り株からは細い萌芽がたくさん生えてきており、雑木の生命力を感じる。1mぐらいに成長したら優勢な芽に間引くようにしたい。

じょじょに明るくなってきた林内を見ると林縁の元気な草とは違った、小さな草が見えてくる。昔の里山がどのような風景だったかはわからないが、継続する作業によって起こる変化によって、木や草がどのようなようになっていくのか楽しみである。今年は6方形区の内5箇所まで間伐が終了する予定であり、今後も同様の観察を継続する予定である。

⑦木曾山脈の冷温帯溪畔林構成種と立地環境の対応関係

深町篤子

溪畔林は河川源流域で成立し、林内には多様な生物が生育していることが知られている。溪畔林は特有な攪乱体制の下で成立することから、強い人為攪乱と過剰な採食圧に対しては可塑性が低く、脆弱であると考えられる。木曾山脈を刻む天竜川の上流域においては溪畔林に関する情報に乏しいことから、本稿では木曾山脈における溪畔林の分布と種構成、立地環境（傾斜、観察された表層基質の状態、微地形）を記録し、報告した。天竜川支流のうち、北は小沢川から南は黒川までを調査地として、植生調査は15ヶ所で行った。溪畔林の代表的な林冠構成種であるシオジやサワグルミの優占林を確認できない沢が多かった。また、与田切川以外の支流で確認した溪畔林はいずれも小規模であった。オンダ、イトマキイタヤ、ヤマアジサイなどは常在度が高く、木曾山脈における溪畔林の主要な構成種としてとらえられた。現時点で植食動物の過密による植生の変質は認められなかった。

⑧「伊那谷の植物相、植生調査」

南信州植物・植生調査会

今年度は、飯田市龍江、泰阜村唐笠(69種を記録)、阿南町和合(61種を記録)、同富草(61種を記録)、飯田市三穂(217種を記録)、同上飯田(187種を記録)、伊那市桂小場(191種)、飯島町シオジ平(193種を記録)、大鹿村塩川(123種を記録)、同釜沢(125種を記録)、同釜沢奥(128種を記録)、同大河原(161種を記録)、売木村にて調査会を行った。長野県レッドリスト記載種は、ミスミソウ、イワヘゴ、クラガリシダ、コジキイチゴ、オオハナワラビ、イワオモダカ、トダイアカバナ、カワラウスユキソウ、ニッコウヒョウタンボク、ヤシヤビシヤク、ウリカワ、カワラニガナを確認した。

このほか、会員の石井佳代子さん、上野勝典・由貴枝さん、大田秀子さん、木下義彦さん、林芳人さん、前島正介さんが、自主調査により、イノウエシダ、タカオシケチシダ、オオキヨズミシダ、イナトウヒレン、ツルカノコソウ、アマナなど、南信地域に生育する長野県レッドリスト記載種37種の標本を採集した。

飯田市美術博物館にはトータルで316点の標本を寄贈した。

⑨「長野県産陸・淡水産貝類の分布と変異」

飯島國昭

未整理だった長野県内の標本の生理もバラバラに箱の隅に入ったものなどの処理を除いてほぼ終了した。その中の一つムシオイガイ類を香川県の矢野重文氏に同定の再検討を依頼し、終了した。さらに、ゴマガイ類の検討も引き受けていただいたので、この3月に送る運びとなっている。

外来種のコモチカワツボの調査では、飯伊地区の様子が大分明らかとなってきた。天竜川と竜西一貫水路の間から確認されているが、精査して分布域を詰めることと、上伊那地区の広がり調査が課題として残った。また、タイワンシジミ類と思われる標本が2か所で確認された。専門家に同定を依頼して分布のひろがりを追う必要がある。

同定の確実な種から「長野県産陸・淡水産貝類の分布と変異」の表題に従って原稿の下書きを始めた。多くの先輩の指導を受けながらより良いまとめにしていきたいと考えている。

⑩「ヤマネの分布境界域における調査研究」

三石邦廣

2001年12月に飯田市上村日陰岩の民家で、関西のヤマネと思われる1個体が偶然発見された。そのため、その民家に近い飯田市上村1番地および同程野山国有林(以下、上村調査地)が、関西型のヤマネと関東型のヤマネの分布境界域にあたるのではないかと仮説をたてて2011年度に継続して調査を行った。その結果、上村調査地において、ヤマネは確認できなかったが巣箱利用形跡はあったのでヤマネが生息していることは確実である。上村長地周辺が関西型のヤマネの分布境界域にあたるか、さ

⑪雨の日の夜間に路上で見られた両生類の季節的变化(その2)ー松川町生田地区の県道においてー

小椋吉範

平成22年と23年に松川町生田地区の県道の約8.1km区間で、雨の夜に路上に出現する両生類について毎月1回の全数調査を行った。この調査で生田地区の両生類についての季節的な出現状況をつかみ、種と活動との関係を明らかにしたいと考えた。

平成23年の調査では、両生類が出現した2月から11月までの踏査で、総個体数784、無尾目8種、有尾目1種を確認した。

出現時期は、幼体が陸上に上がってきたものを除くと5月と9・10月に多い傾向がある。また、種によって出現時期に差異がみられるが、おおむね気温が5℃以上の時に出現している。

夜間に出現することについては天敵から身を守ること、雨の夜に出現することについては水分の条件の他に、餌となる生物を摂食することもあるのではないかと考えた。